

# パンタナール通信

南北米福地開発協会 会報 2005年8月1日発行 第23号



## パラグアイ訪問記

(二〇〇五年六月一八日―一九日) (文：飯野貞夫)

六月一八日にNYを発って、アスンシオンに向かった。日本は夏に入ったが、パラグアイは短い秋の季節で、涼しいのぎ易い気候であった。空港から市街地に向かう街並みの石垣の上にも時折、枝を伸ばした早咲きのラパッチョがピンク色に咲いていた。

レダの方面が小雨で、滑走路に降りれないという情報で、急遽、日本人移住地ラパス市を訪ねることにした。アスンシオンから車で国道一号線を四〇〇km程南東のアルゼンチンとの国境の街、エンカルナシオン方面に向かった。ラパス市はエンカルナシオンから北に四〇kmほど手前にある。その途中に世界遺産となったトリニダード遺跡がある。映画の「ミッシェル」の舞台となった所で、一七世紀初め、ザビエルと同じ旧教のフランシスコ派の宣教師が、現地人インデイヘナと共に理想郷建設に燃えて七〇年間栄えたが、スペイン本国によって攻められ、遂に潰されてしまったという。観光施設は小さな売店があるだけ。全くの廃墟の残骸で、当時の面影をかるうじてとどめているが、案内書も説明の掲示板も何もない。近くの大学の学生さんが、遺跡入り口でお客を待っていてわずかな手当てで案内してくれた。理想を求めたという意味においては我らの先達でもあるため、ある種の共感するものを感じた。話が前後してしまっただが、ラパス市では、田岡大使の実家の大きな門を潜って進むと、土塀に囲まれて中門があり、そこに息子さんが待っていて、笑顔で出迎えてくれた。昔の庄屋が陣屋のような家に案内してくれて、昼食まで準備して歓迎して下さった。「親父から大切にと言われてるものですか。」と言いながら、ご夫人やお子さん達を紹介してくださり、歓談の一時を過ごした。食後、トヨタのランドクルーザーに乗せて頂いて、町中をガイドしてくださった。田岡大使はじめ数少ない日本人が半世紀を懸けて苦勞し開拓して築き上げた街です。途中で亡くなった方も、脱落して行った人たちもいます。森林原野を開拓して見事な農場が一面に広がっていました。四月から九月に小麦、九月から三月まで大豆を作っている方が多いそうです。開拓者の苦勞の上にこの街や畑があると思うと感無量でした。翌日も未だレダの天候が芳しくないということで、吉村、三石、私の三人でシュウダデルエステに飛びました。初めて降りたパラグアイ側のイグアス空港には、ベニグノさんが出迎えてくれて、タクシーで案内してくれました。空港から二〇km程のところにあるイグアス日本人移住地は千人近くの人が住むパラグアイ最大の日本人町です。

さすがに中央農協、レストランやスーパーマーケット、公民館、学校、病院など、日本人が住み易い環境が整えられていました。街の中央には快晴の青空に赤い鳥居がくつきりと聳えた公園がありました。園内には昭和五十三（一九七八）年、当時の皇太子ご夫妻（現天皇陛下ご夫妻）が植樹をされたケブラッチョの木が二〇mを越えるほどの大木に育っていました。郊外を走ると広々と広がる丘陵の畑には大豆、トウモロコシ、小麦、米、菜の花畑（菜種油）などが作られています。薬草になる植樹園も一部見られました。牧畜は余り大掛かりにやっているとところは少ないそうです。

殆どの日本人家族は農業開拓で基盤を作り、今では二世、三世が引



飯野氏、田岡氏、佐野氏（大使の自宅前）

継ぎ、学校も立派にあります。大学は日本やアメリカに留学している人も増えているそうです。その人達は農業を引き継ぐのではなく、親の築いた資産を元に土地を更に求め、それを他に貸すことで収益を上げていくというスタイルになったり、他の事業に手を広げていくか、人によっては日本に出稼ぎに行き、そのまま居ついてしまふ若者も居るようです。勿論、農業をしつかり引き継ぐ二世、三世もいますが、天候異変や作物相場の変動で、絶えず何を耕作するか研究して、市場ニーズとのバランスを考えながら対応していく必要があり、中々大変なようです。



「レストラン白澤」で、バイキングスタイルのパラグアイ料理（1人3ドル！）を頂いた後は、イタイプー（ガラニー語で歌う石）ダムに回りました。パラグアイ側からの案内は今までありませんでしたが、昨年パラグアイ側からも無料でバスが出て、女性ガイドがダムの案内をしてくれるようになりました。お客が殆ど居ないということもあってとても丁寧なダム施設の案内してくれました。お陰で時間を取り過ぎてしまったほどでした。世界一の発電量を誇る二〇基（内十基がパラグアイ用、後はブラジル用）からの発電タービン（ドイツ・シーメンス社製）は、パラナ川からの豊かな水量を使って毎日稼動して、今日ではパラグアイの貴重な外貨収入源になっています。というのには、パラグアイの電力使用量は、タービン一基の約半分までかなえるので、他はブラジルに売っているのです。という事は、ブラジルの電気使用量が、そのままパラグアイとの産業の規模の違いに見えます。

近くに動物園が出来たというので寄ってみました。昨年八月に開館したとの事ですから、全てが新しく出来ていました。小さいながらも博物館も併設されていて、インディヘナの歴史的土器や生活用品などもきれいに展示されていました。パラグアイの貴重な動物達も照明つきのガラスケースの中に剥製で展示され、説明がされていました。時間が無いので素通りして行こうとしたら、数少ない客に見てもらえなくては大変とばかりに、数名の女性職員が熱心に鑑賞を薦められ、結局足早ながら見ることにになりました。今後の観光ツアーや青年ボランティア隊のことなど考えて、参考になりました。動物園の動物もできる限り自然に近い形で飼われていて、都会の狭い檻の中に入れられていない動物から比べれば、幸せそうでした。ここも身近にパンタナールの動物を確認でき、良かったと思います。全て無料というのが、やっと観光に力を入れるパラグアイの政府の姿勢を見る思いでした。





シューダデルエステ(東の街)は、パラグアイ第二の都市といわれ、ビルも沢山並んでいますが、何といってもここは、自由市場になっていて、メルコスルの商品をはじめ様々な国の工業製品も、農産物も、日常品も売られていて、安い為、香港に次ぐ賑わいとなっています。担ぎやさんが仕入れに沢山来るそうです。商いは朝4時くらいから始まり、夕方5時で終わります。日が沈む前の5時頃着いたのですが、店はほとんどシャッターを下ろしたり、片付けたりして、道路は至るところゴミの山が築かれています。この時間帯、この様は香港と似ているようで似ていない街です。

今朝までにはゴミ回収車がきれいにし、早朝までにはゴミ回収車がきれいにし、垣間見るようでした。

夜は九時頃から、食事と踊りのショウがあるというブラジル側のレストランに行きました。ピザがなくても行けるのがみそです。每晚300席以上の椅子が満席だというのですから、観光で知られた人気のスポットという感じです。食事はバイキング、ショウは南米のダンスを中心に、様々曲芸まがいのステージが繰り広げられ、客席の熱気を高めていました。一人二五ドルというのがブラジル物価では、ちょっと高いかなと思えますが、南米の夜のひと時を楽しむ貴重な場所です。余りに遅くなり、吉村さんも風邪気味で食事が出来ず過労気味のため、夜行バスで帰るのをやめて、三人部屋で三〇ドルという木賃宿に宿泊して、朝アスンシオンに戻りました。(飛行機は一人七〇ドル)

、六月二二日午後二時二〇分、アスンシオン空港を五人乗りセスナ機は曇り空へと飛び立ちました。パイロットと三石さん、吉村さん、そして私の四人が後ろに荷物を



日本人スタッフと現地労働者

沢山載せてのフライトです。次第に上昇し、雲を突き破って白雲の海原の上に出ると、陽が輝き四方八方真っ青で吸いこまれるような青空でした。飛行時間二時間二〇分で遂にレダに到着しました。中田先生を中心に、懐かしいご苦労されてきた方々が、等しく笑顔で迎えてくれました。私にとって昨年の12月以来のレダ訪問です。常駐している警察官や海軍の方達もニコニコと歓迎の手を差し伸べてきました。

レダは今にも降りそうで降らない曇りの一日だったそうで、よくも堪えて降らないでくれましたと思わず天に感謝しました。早速、会長がされるように中田さんが車を運転して、吾等到着の三人を連れて、園内を見て回りました。新農場地や、養殖場も植樹園に沿って作られていました。馬の厩舎、牧童の住居、農場研究所など、次々に未来に向けての基盤が準備されていました。

奥地向かっての道路脇も椰子の木が伐採され、藪が取り払われて整地がされて両脇200m位の幅でズーと、牧場用に奥地まで準備が進められていました。

今は毎日牛の数が確認されて、きちつと管理されているそうです。会長の基準をしっかりと相続された中田先生を中心に、数少ないメンバーでよくここまで着実に進めてきたものだと深い感銘を覚えました。まだ明け染めぬ夜空にたった一つの星、何処かで鳴きつづける、虫の音、早くもさえずる小鳥たち、レダは皆早起きです。6時からの朝食後、今日の打ち合わせがされて、6時30分、労働者の点呼と指示がなされ、大空一面まだらで灰色の曇り空の下、一斉に一日の出発がなされました。(二十四号に続く)



魚の養殖場

### マジ村学校建設 支援金のお願い

青年奉仕隊が8月25日に出発します。建設資金が十分に集まっていません。よろしくお願ひします。  
送り先：郵便口座  
南北米福地開発協会  
事務局 代表  
柴沼邦彦 10180  
- 77680471  
建設資金と付記して下さい

### 南北米福地開発協会事務局

〒二二三 〇〇〇一  
神奈川県川崎市高津区  
溝口三十一番十五  
電話 〇四四 八二九 二八二一  
FAX 〇四四 八二九 二八二〇